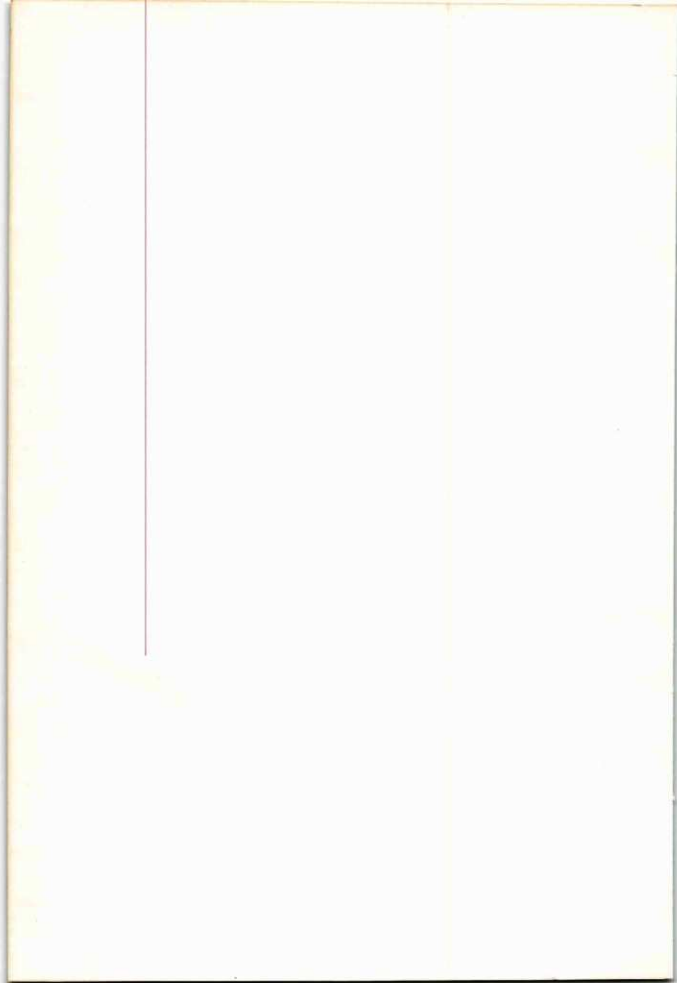


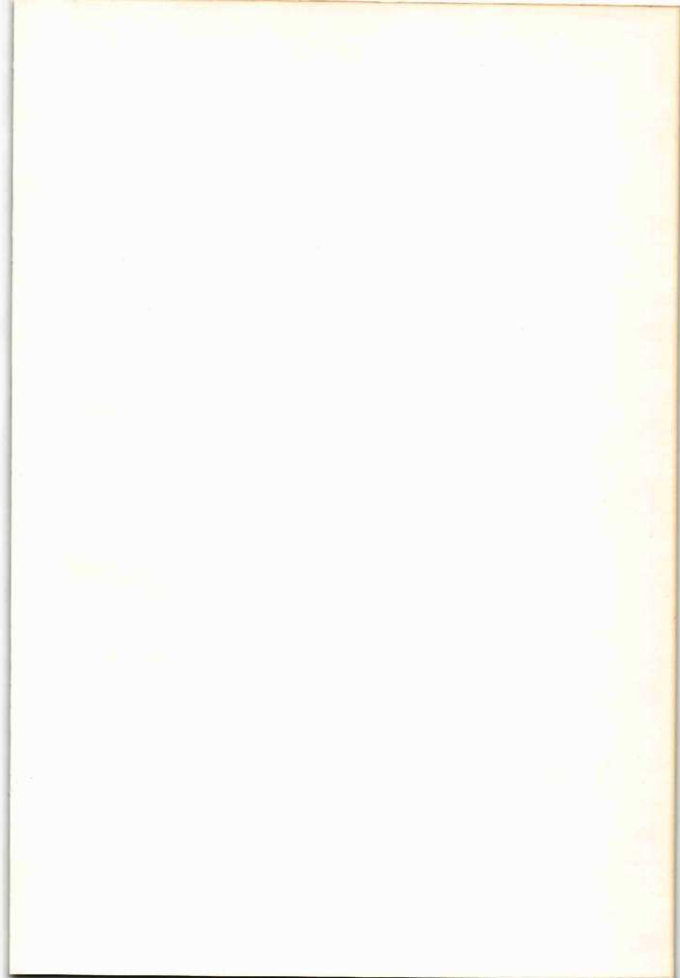
新千歳空港用地内埋蔵文化財 発掘調査報告書

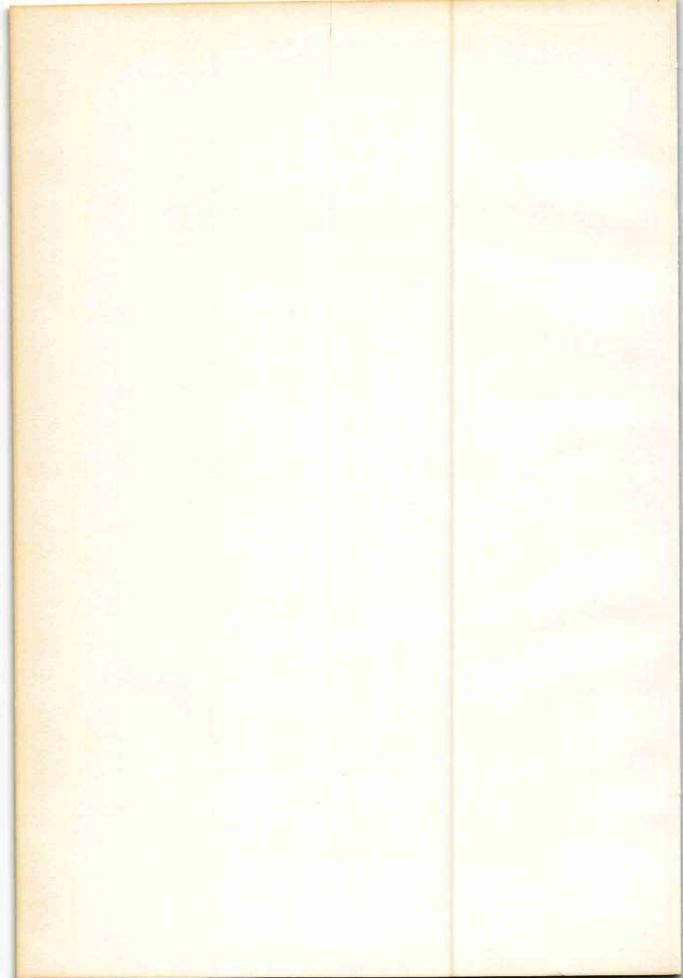
第2分冊 美沢川流域の遺跡群Ⅹ

昭和61年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター







新千歳空港用地内埋蔵文化財 発掘調査報告書

第2分冊 美沢川流域の遺跡群Ⅹ

昭和61年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

10

$$11 \quad \frac{1}{2} \left(\frac{1}{2} + \frac{1}{2} \right) = 1$$

$$12 \quad \frac{1}{2} \left(\frac{1}{2} + \frac{1}{2} \right) = 1$$

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

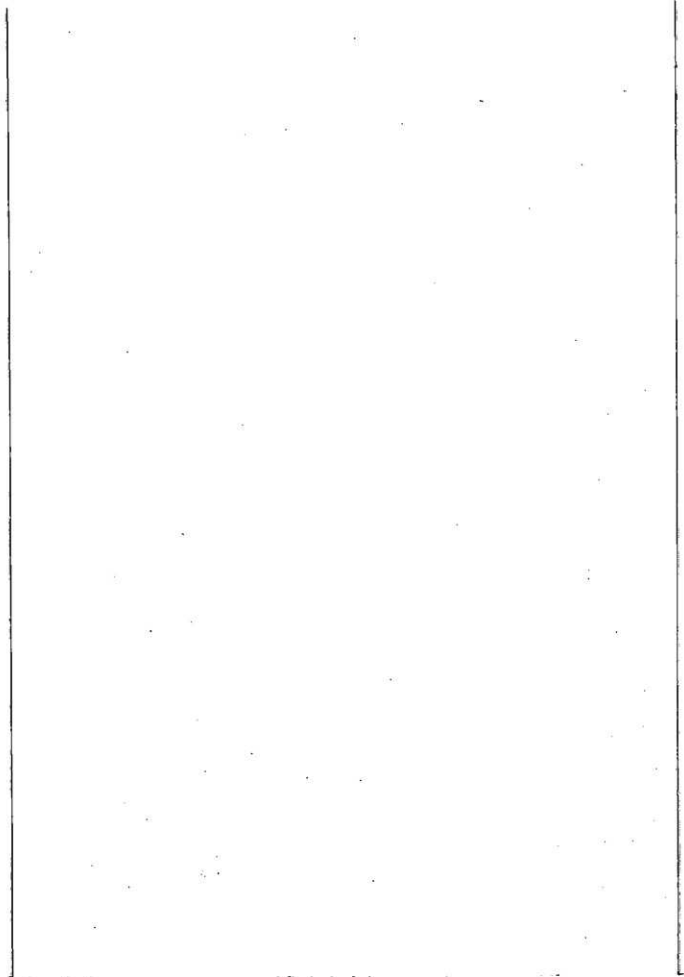
33

34



▲
動物の足跡（北から）

◀道跡（南東から）



目 次

口絵	
目次	
挿図目次	
表目次	
図版目次	
美々3遺跡の調査	1
1. 概要	1
2. 道跡と動物の足跡	3
3. 遺構と遺物	7
(1) 遺構	7
(2) 遺物	9
1) 土器	9
2) 石器等	15
4. まとめ	23
写真図版	31

挿 図 目 次

図1 調査地区	1
図2 道跡	4
図3 道跡と動物の足跡	5
図4 遺構位置図	7
図5 P-1~5	8
図6 土器(1)	11
図7 土器(2)	12
図8 土器(3)	13
図9 土器(4)	14
図10 石器等(1)	16
図11 石器等(2)	17
図12 石器等(3)	18
図13 石器等(4)	19
図14 石器等(5)	20

図15 土器分布図	23
図16 石器分布図(1)	25
図17 石器分布図(2)	26

表 目 次

表1 遺物一覧	2
表2 掲載実測土器一覧	21
表3 掲載拓影土器一覧	21
表4 掲載石器一覧	22

図 版 目 次

図版1 遺跡風景	31
① 遺跡遠景(東から) ② 調査後の風景(東から)	
図版2 調査風景	32
① 火山灰除去風景(西から) ② 含包層調査風景(北西から)	
図版3 遺構、道跡と動物の足跡	33
① P-1~5(西から) ② 道跡(南東から)	
③ 動物の足跡(1)(南東から) ④ 動物の足跡(2)(北から)	
図版4 包含層の土器(1)	34
図版5 包含層の土器(2)	35
図版6 包含層の土器(3)	36
図版7 包含層の土器(4)	37
図版8 包含層の土器(5)	38
図版9 包含層の石器(1)	39
図版10 包含層の石器(2)	40

美々3遺跡の調査

1. 概要

美々3遺跡は、美々4遺跡の西側に隣接する。便宜的に調査区のグリッドのGラインを境として東側を美々4遺跡、西側を美々3遺跡としているが、遺跡自体は連続するものである。

本年度の調査は、美々3遺跡の4,565m²について行った。ここは、美沢川北岸の標高25mの台地部分にあたる。発掘調査は分布調査や美々4遺跡の調査結果をもとにⅡ黒層のみを対象とした。

調査の結果、Ⅱ黒層上面からは昨年に引き続き道跡と動物の足跡を確認した。道跡は、昨年度調査したものにつながり、調査区の南東―北西方向にのびている。動物の足跡は、なかには

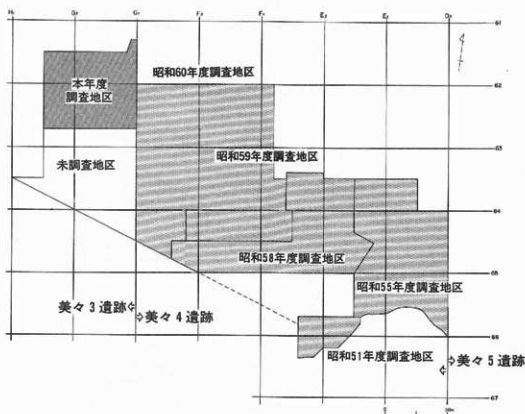


図1 調査地区

不明瞭なものもあるが、多くはキツネのものと思われる。

遺構は用途不明の土壌5個が確認された。調査区の北側にまとまって分布し、規模は径0.5～0.7m、深さ0.3mと小型である。遺構に伴う遺物は出土しておらず、時期は縄土のレベルから縄文時代の古い時期と思われる。

遺物は、土器片3,518点、石器等11,173点で合計14,691点が出土した。土器は、縄文後期末～晩期初のものが多く、次いで晩期末、中期末の順に多い。石器等は、石斧（未成品を含む）とたたき石が多い。これらの遺物は調査区の南東部に多く分布している。なお、旧石器確認調査については、未調査部分の調査を行う時点で実施することとし、今回は見送った。

表1 遺物一覧

	分 類		II 黒			
	III	b-3	途 橋	包 含 層	計	
土 器	IV	a		2	2	
		b		8	8	
		c		733	733	
	V	a		691	691	
		c		1,110	1,110	
	計			3,518	3,518	
石 器 等	O	0		23	23	
		1		4,396	4,396	
		1 a		34	34	
		2		4,875	4,875	
		3		1	1	
	I	A	4		2	2
			6		1	1
			7		16	16
			破片		11	11
		B			6	6
			破片		28	28
			III	D		4
	破片			1	1	
	E			12	12	
	IV	F	破片		1	1
					7	7
		2		1	1	
			破片		40	40
			破片		22	22
		V	G		5	5
			K		2	2
			M		12	12
	X	0		1,671	1,673	
		1	2	11,171	11,173	
計		2	14,689	14,691		
合 計		2				

2. 道跡と動物の足跡

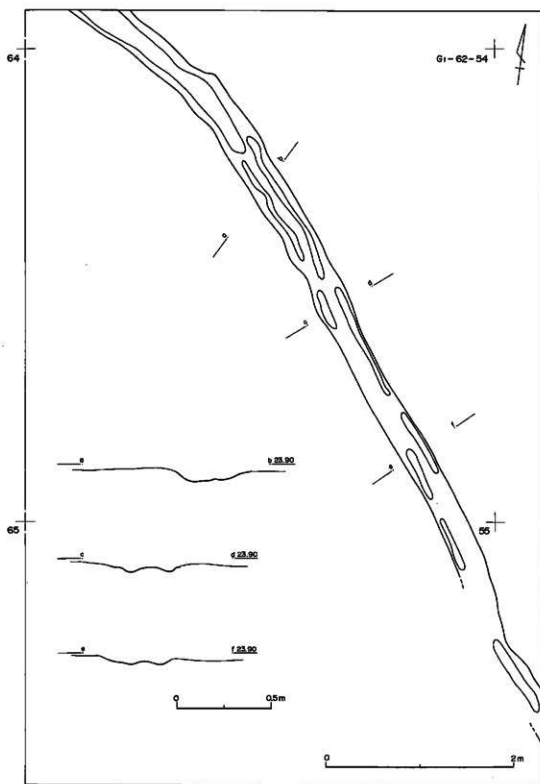
Ⅱ黒層上面より道跡を1条と動物の足跡を4列確認した(図2、3)。道跡は、調査区の南東-北西にかけ延長100mにわたり確認され、さらに北西方向へ延びていると思われる。これは昨年度美々4道跡で確認された道跡につながり、総延長145mである。道跡は幅30~40cmの溝状のくぼみで、部分的には2条の並行する浅いくぼみとなっている(図2)。また今回は、道跡の性格や時代を決定する手がかりを得ようとして、道跡上に分布する遺物についてその地点を記録し取り上げた。その結果、V群c類の3個体分の浅鉢などの土器片27点、有茎石鏃3点、フレイク2点が出土したが、とくに新しい知見は得られなかった。道跡の南東部は来年度以降の調査予定地にかかっていたが、すでにその部分のTa-c層上部も重機により除去していたため、この部分についても合わせて調査を行った。

動物の足跡は4列確認した(図3)。深さ2~3cm、径10~13cmの円形もしくは楕円形の浅いくぼみが30cm間隔でついている。足跡列は西から順に①~④と呼称した(図3)。4列のうち歩幅の一定している③、④の2列については、足跡の大きさ、並び方からキツネのものと思われる。残る2列の足跡の配列は乱れているが、その大きさと間隔からこれもキツネの可能性がある。以下、①~④の順に説明を加える。

- ① 調査区西部にあり、北-南の方向で延長28mである。足跡の間隔は一定していない。
- ② 調査区南西部にあり、北-南の方向で延長22mである。①同様足跡の間隔は一定していない。
- ③ 調査区中央部にあり、北西-南東の方向で延長32mである。途中2か所途切れるがコースからみて一連のものと考えられる。歩幅は26~30cmでほぼ一定している。
- ④ 調査区北部にあり、西-東の方向で延長60mである。途中4か所途切れるが、コースからみて一連のものと考えられる。足跡は規則的についており、歩幅は30cmである。

これらの足跡の細部、すなわち肉球の跡、爪跡についても精査したが確認することができなかった。そのため足跡を残した動物の進行方向は不明である。昨年調査ではキツネのほかにはウサギ、シカの足跡が確認されているが、今回はキツネのみのようである。また今年の4列の足跡列の中には昨年の足跡に直接つらなるものはない。

ちなみに調査期間中に、Ta-cの排土の山に動物の足跡を見つけた(図版3-④)。深さ4cm、径6~8cm、足跡の間隔は16~22cmの円形もしくは楕円形のくぼみである。足跡の大きさ、並び方からキツネかまたは野犬のものと思われる。足跡の深さが調査区で確認されたものより若干深い、当時の地面の硬さがTa-cの排土山程度であったことがわかる。



3. 遺構と遺物

(1) 遺構

調査区北側の台地平坦部より5個の土壌を確認した。土壌は径0.5~0.7m、深さ0.3mのほぼ円形を呈している。遺構に伴う遺物はなく、P-4の覆土から緑色泥岩の剥片と多量のカーボンを検出した。P-1の東側0.8mのところに土壌の揚土（Ta-d₂）と思われるものを確認した。揚土のレベルはⅡ黒層下部である。このことから土壌の時期は特定できないが、縄文時代の古い時期と思われる。なお、用途についても不明である。

以下遺構別にその位置、平面形、規模、土層説明を列記する。

P-1

位置 G₁-61-67・77

平面形 円形

規模 0.59×0.60/0.40×0.42/0.30

- 覆土
- 1 黒褐色（Ⅱ黒+d₁>>d₂）
 - 2 暗褐色（d₂+d₁>>Ⅱ黒、ガラガラした感じ）
 - 3 黒色（Ⅱ黒>d₁、ボンボンした感じ）

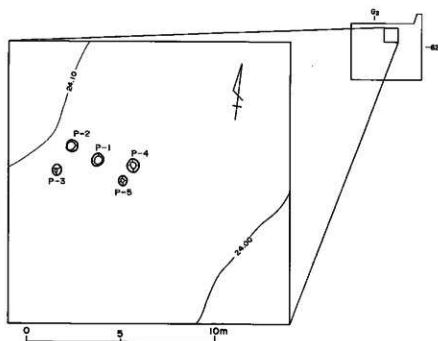


図4 遺構位置図

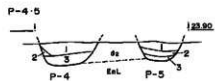
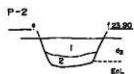
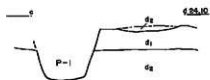
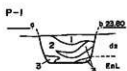
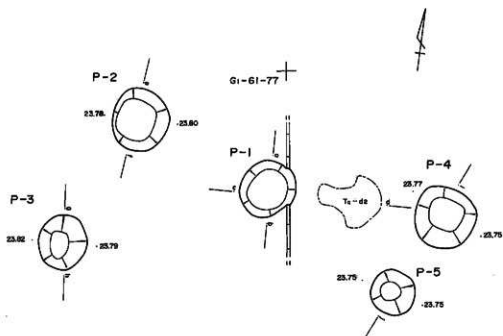


图5 P-1~5

P-2

位置 G₁-61-77 平面形 円形

規模 0.60×0.65/0.40×0.43/0.30

- 覆土 1 黒色 (Ⅱ黒 + d₁、ガラガラした感じ)
2 黒色 + 橙褐色 (d₂ > Ⅱ黒、ボール状の d₂)
3 橙褐色 (d₂、ボール状で軟かい。)

P-3

位置 G₁-61-77 平面形 円形

規模 0.52×0.56/0.19×0.28/0.25

- 覆土 1 黒色 (Ⅱ黒 + d₁、ガラガラした感じ)
2 黒色 + 橙褐色 (d₂ > Ⅱ黒)

P-4

位置 G₁-61-67 平面形 円形

規模 0.65×0.65/0.37×0.33/0.25

- 覆土 1 黒褐色 (Ⅱ黒 + d₁ > d₂、カーボンを含む。)
2 黒褐色 (Ⅱ黒 > d₁)
3 暗茶褐色 (Ⅱ黒 + d₁ + d₂)

P-5

位置 G₁-61-67 平面形 円形

規模 0.50×0.45/0.22×0.20/0.19

- 覆土 1 黒褐色 (Ⅱ黒 + d₁ > d₂、カーボン少量、しまりなし)
2 暗茶褐色 (Ⅱ黒 + d₁ > d₂、カーボン少量、しまりあり)
3 黒色 (Ⅱ黒、やや粘性あり)

遺物 2層下部より緑色泥岩の剥片が2点出土した。西壁より多量のカーボンを確認した。

(2) 遺物

Ⅱ黒層から14,689点の遺物が出土した。以下代表的なものを図示し、説明する。

1) 土器 (図6~9)

Ⅲ~Ⅴ群のものが3,518点出土した。時期別の内訳はⅣ群c類~Ⅴ群a類のものが41%、Ⅴ群c類が31%、Ⅲ群b-3類が28%である。Ⅲ群b-3類は南東部に多く、Ⅴ群c類~Ⅴ群a類、Ⅴ群c類は中央部と調査区の周辺に点在する。以下、分類別に説明を加える。

Ⅲ群b-3類 (図7、8-1~46)

ア;押し引きの無いもの (1~16)

口縁部に肥厚帯の無いもの (1~10) とあるもの (11~16) に分けられる。1・3・4は口

縁部に円形刺突文が見られないが、小破片のためと思われる。5・6は円形刺突文の上が無文帯となっている。10の円形刺突文の径は大きく18mmある。11は円形刺突文の下にわずかにLRの縄文が見える。円形刺突文の径は5mmと小さい。13は径3mmの円形刺突文が口唇上にも施されている。15の肥厚帯上には、竹管状工具を垂直に近い角度で用いた押し引きに近い文様が2段みられる。口唇上にもへう状工具・棒状工具による押し引きと刺突がある。あるいは14とともに「イ」に分類すべきものかもしれない。

地文は、LRの斜縄文が多く、9・12のように羽状縄文が施文されているものもある。

イ；口唇、口縁部に押し引きのあるもの（17-40）

押し引きが口唇上のみあるもの（17-20）、口唇と円形刺突文の上にあるもの（21-29）、円形刺突文の上のみあるもの（30-40）に分けられる。円形刺突文の上の押し引きは2段が多く、ほかに1段、4段のものもある。21は、口縁上部の無文帯部にハの字状の押し引きが施されている。28の円形刺突文は2個とも内面まで貫通している。刺突の断面が円錐台状を呈し、内面の刺突の径が3mmなので細い棒状工具により押し抜けたものであろう。31-35は口唇内面にも縄文が施文されている。38の押し引きはやや丸みがある。40の円形刺突文の上の押し引きは4段あるが、上下各2段ずつ施文されている。

地文は、LR斜縄文、RL斜縄文、羽状縄文の順に多い。

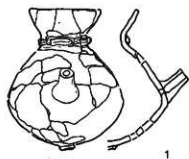
ウ；その他（41-46）

41-45は土器の片面もしくは両面に赤色顔料の付着するものである。41・42は両面に、43・44は外面に、45は内面に付着している。42は円形刺突文があるので口縁部近くの破片である。44は押し引きが横位に2段、縦位に1列施文されている。46は結束縄文の施された底部の破片である。

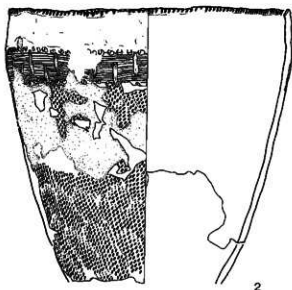
M群c類（図6-1、図8、9-47-56） 図6-1は無文の注口土器である。頸部に粘土紐の貼付があり、底はきわめて小さなあげ底である。土器の表面は急入りにみがかれている。49は口径30.4cm（推定）の深鉢の口縁部破片である。RL、LRの斜縄文が施され、内から外への突瘤と外へ張り出した貼付帯がある。貼付帯には真上から縦に棒状工具による刺突が施されている。51は内から外への突瘤を施し、その後、瘤の両側を爪先等でつまんだようである。52-54は無文土器である。52には内から外への突瘤がある。53は口縁上部に径2-3mmの焼成前の孔が2か所ある。土器内面の穴の周囲は若干より上がつており、外から内へ向けてあけたものである。53・54は口縁部の形態に相違がある。53の口縁部は外へ開くが、54はすばまる器形である。55・56は羽状縄文の施された胴部破片である。

V群a類（図9-57-60） 57は小波状の口縁部破片。58はゆるい山形突起の口縁部破片である。口縁上部に節の小さいLRの斜縄文が施文され、下端には三叉文が見える。59も凸レンズ状文様の両側に三叉文が施されている。

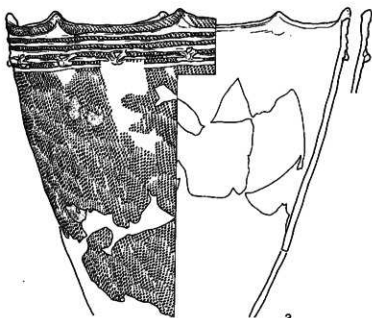
V群c類（図6-2・3、図9-61-72） 図6-2はタンネットウシ式の深鉢である。器形は口縁が若干内傾し、胴部から底部にかけてはほとんど直線的にすばまる。口唇は切り出し



1



2



3

图6 土器(1)

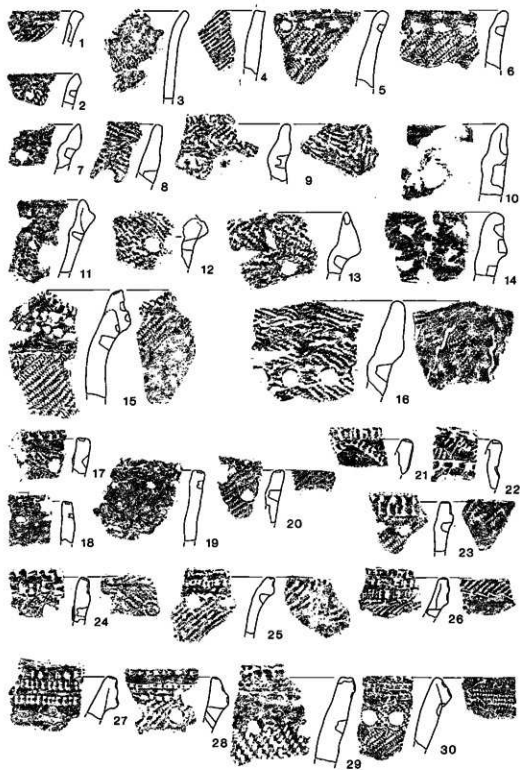


圖7 土壤(2)

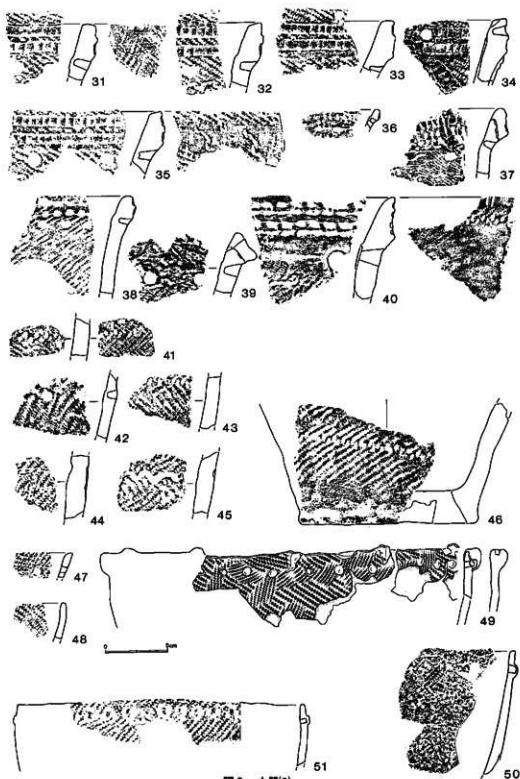


圖 8 土器(3)

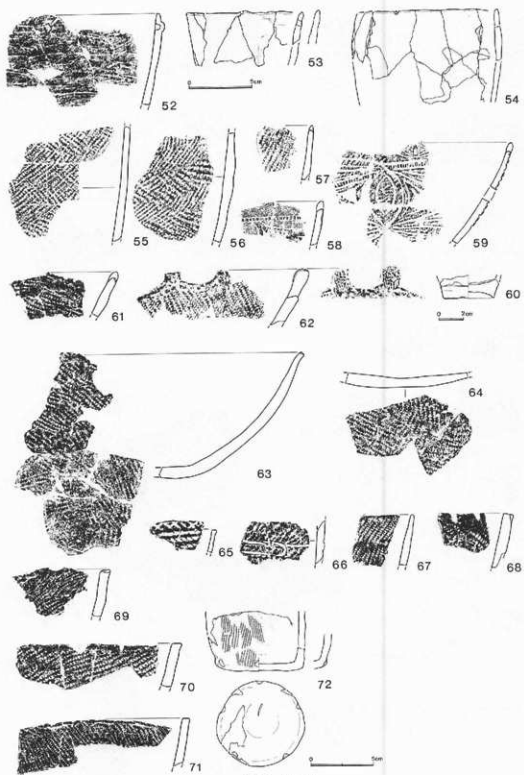


圖9 土器(4)

形でLの捺糸圧痕文が施されている。口縁上部には幅4cmの無文帯があり、その下に同じ幅で横位の細線が走る。細線の上には半截竹管状工具による縦位の刻みが段違いに施され、その上下には同じ工具による刺突が走る。地文は底部近くまでRLの縦走縄文が施文されている。胴部には火熱によって薄く剥落した部分がみられ、内面上部には炭化物が付着している。

図6-3は大同A式に相当する深鉢である。最大径が口縁部にあり、胴、底部にかけ徐々にすぼまる。8個の小突起があり、口縁上部はRLの斜縄文を磨消するように浅い5条の平行沈線が施されている。下から2番目の沈線上にはA状突起の貼付がある。沈線の下から底部近くまではRLの縦走縄文が施されている。

61-64は浅鉢の口縁部および底部の破片である。61は63と同一個体で、口縁上部に棒状工具による刻みが、口唇には捺糸圧痕文が施されている。62は2個一組の突起の内面に、Rの縄線が縦位に4-6条施されている。63の底面の地文は使用により磨耗している。65は口縁部に3条のLRの縄線文が、口唇には棒状工具による「X」状の刻みが施されている。66は工字文が施された胴部破片。68は口縁上部に棒状工具による刻みがあり、地文はRLの斜縄文である。69は、口唇にRの捺糸圧痕文が施され、地文はLRの斜縄文である。72は体部にLRの縦走縄文が施され、底面の周囲には棒状工具による刻みが5か所施されている。

2) 石器等 (図10-14)

Ⅱ黒層から出土した石器等は11,171点である。このうち剥片石器・礫石器は合計160点で、全体の1.4%にすぎない。器種別の構成では、石斧(30%)とたたき石(14%)が多い。これは、東側に隣接する美々4遺跡でも同様であった。石器の分布は、南東部に多く、それは特定の器種に片寄るものではない。フレイク、チップの集中箇所が調査区東側に4か所ある。このうちG₁-61-39区では5m四方の調査区から1,532点のフレイク、チップが出土している。またG₁-62-25区では長さ3-5cmのメノウ質頁岩のフレイクが21点出土している。ほかの調査区からはこの石材のフレイクは出土していない。

石鏃(1-24) 1は柳葉形鏃で尖頭部と基部を欠損している。2-5は無茎鏃で、平基のもの(2・4)とやや湾入する凹基のもの(3・5)がある。6は菱形鏃で入念な加工が施されている。7-24は有茎鏃である。12は厚みがあり、先端から左側縁にかけ欠損している。13の側面観は湾曲している。18・19はやや大型の石鏃で3.8-4.0cmの長さがある。20・21・23は背面側を全面加工し、腹側面は周縁のみを加工したものである。24は長さ5cmの大型の石鏃である。石質は1-19が黒曜石、20-24が頁岩である。

石槍またはナイフ(25-32) 茎部の明瞭なもの(25-30)と不明瞭なもの(31-32)がある。28は球顆を多量に含んだ黒曜石を石材としている。29・30は接合資料である。30の基部左側面には平坦な原石面があり、そこを打点として背面側に二次調整を施している。石質はすべて黒曜石である。

つまみ付ナイフ(33-37) 片面加工のもの(33・34)と両面加工のもの(35-37)がある。

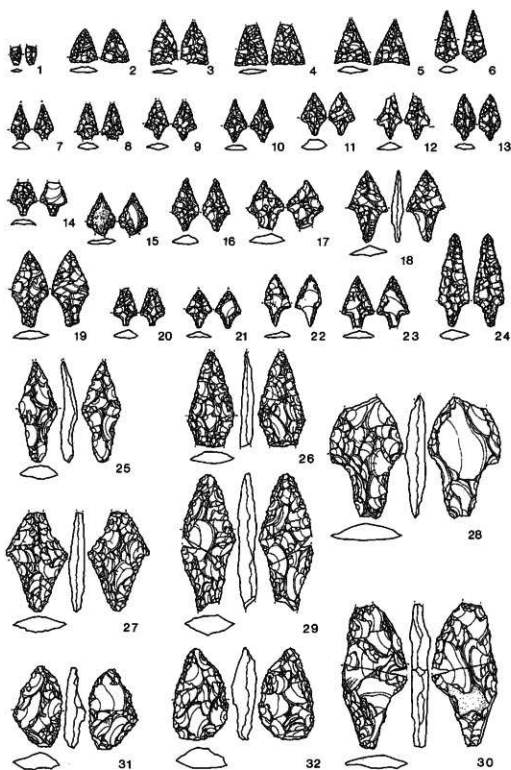


圖10 石器等(1)

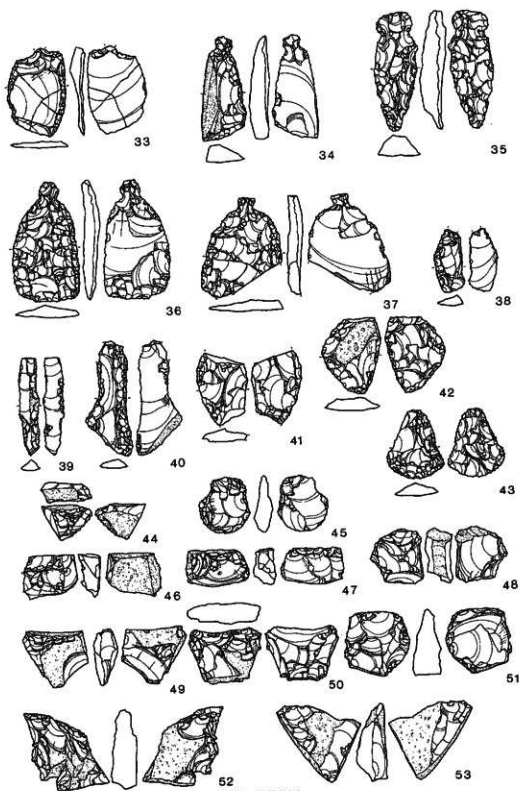
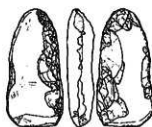


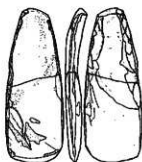
圖11 石器等(2)



54



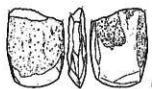
56



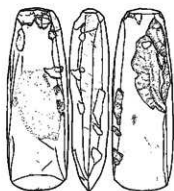
58



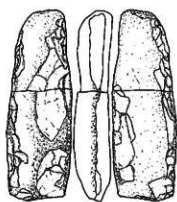
55



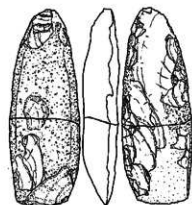
57



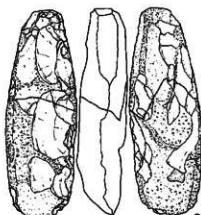
59



60

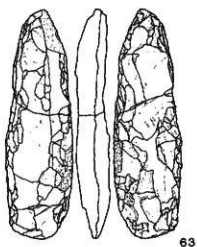


61

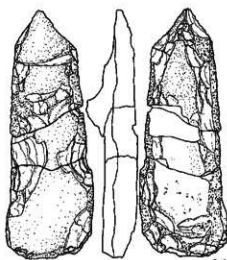


62

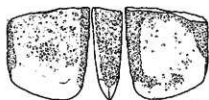
圖12 石器等(3)



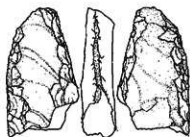
63



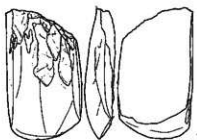
64



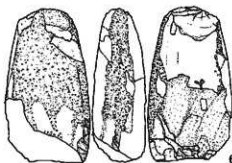
65



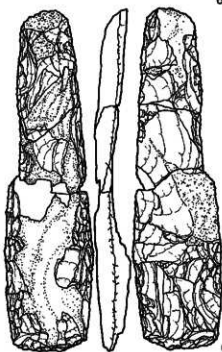
68



66



67



69

圖13 石器等(4)

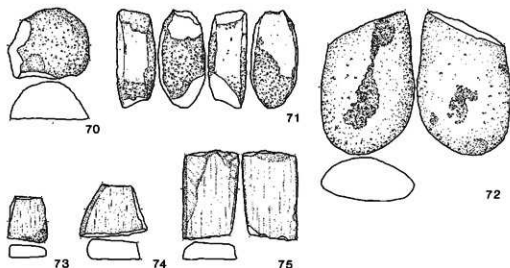


図14 石器等(5)

35はつまみ部を欠損している。34の背面左側縁には広い原石面を残している。36・37は、幅が広く薄身のものである。刃部は背面右側縁にある。石質は33が頁岩でほかは黒曜石である。

スクレイパー (38~43) 一側縁または両側縁に刃部があるもの(38~42)と下端部に刃部があるもの(43)に分けられる。43は両面加工でそれ以外は片面加工のものである。

石核 (44~53) 45を除いて、いずれも原石面を有する石核である。剥がされた剥片はいずれも小さいものばかりで、何の目的で剥がされているのか不明である。遺跡から出土した小さいフレイクを観察してもとくに加工されたものはない。石質は全例黒曜である。

石斧 (54~69) 石斧は未完成が多く、完形のもの1点(59)のみである。ほかは身部もしくは刃部の破片である。未完成には、明らかに刃部を作出していないもの(56・60・62・64・69)と明瞭な刃部がみられないもの(61・63)がある。69は長さ27.3cmの大型のもので、15~40m離れた3地点の破片が接合した。刃部を作出しておらず、製作途中で破損したものであろうか。

石質は緑色片石が1点(57)、黒色片石が3点(55・63・69)、ほかはすべて緑色泥岩である。

たたき石 (70~72) 70は玄武岩の球形礫を素材とし、全面にたたき痕が認められる。遺跡からはこの種の石材を利用したたたき石の破片が多く出土している。71は凝灰岩の角柱礫を素材としている。背面と腹面の一部にたたき痕が、両側面に擦痕が認められる。72は片麻岩の扁平礫を素材とし、背面と腹面の一部にたたき痕が認められる。

礫石 (73~75) 全例とも砂岩を石材とし、背面・腹面とも砥面として使用している。

表2 掲載実測土器一覧

番号	名称	分類	発掘区	大 き さ (cm)			写真 図版番号
				器高	口径	底径	
図6-1	注目土器	IVc	G ₁ -62-40	14.9	7.6	1.7	4
2	深鉢	Vc	G ₁ -62-65	(29.5)	30.0	—	*
3	*	*	G ₁ -62-02	(33.1)	36.8	—	*
図8-49	*	IVc	G ₁ -61-67・G ₁ -61-68	(6.4)	30.4	—	7
図9-53	*	*	G ₁ -61-99	(4.3)	9.4	—	*
54	*	*	G ₁ -61-86	(7.4)	11.4	—	*
72	*	Vc	G ₁ -60-80	(4.8)	—	7.1	8

表3 掲載拓影土器一覧

番号	分類	部位	発掘区	透視番号	番号	分類	部位	発掘区	透視番号
1	III b-3	口	G ₁ -62-84	5	25	III b-3	口	G ₁ -62-81	6
2	*	*	G ₁ -62-65	*	26	*	*	G ₁ -62-21	*
3	*	*	G ₁ -62-34	*	27	*	*	G ₁ -62-36	*
4	*	*	G ₁ -62-65	*	28	*	*	G ₁ -62-01	*
5	*	*	G ₁ -62-55	*	29	*	*	G ₁ -61-97	*
6	*	*	G ₁ -62-18	*	30	*	*	G ₁ -62-52	*
7	*	*	G ₁ -61-67	*	31	*	*	G ₁ -62-14	*
8	*	*	G ₁ -61-17	*	32	*	*	G ₁ -62-81	*
9	*	*	G ₁ -62-16	*	33	*	*	G ₁ -61-99	*
10	*	*	G ₁ -62-85	*	34	*	*	G ₁ -62-44	*
11	*	*	G ₁ -62-90	*	35	*	*	G ₁ -61-38	*
12	*	*	G ₁ -62-26	*	36	*	*	G ₁ -62-45	*
13	*	*	G ₁ -62-10	*	37	*	*	G ₁ -62-84	*
14	*	*	G ₁ -62-18	*	38	*	*	G ₁ -62-35	*
15	*	*	G ₁ -62-96	*	39	*	*	G ₁ -62-65	*
16	*	*	G ₁ -62-32	*	40	*	*	G ₁ -61-15	*
17	*	*	G ₁ -61-88	6	41	*	胴	G ₁ -62-26	5
18	*	*	G ₁ -62-55	*	42	*	*	G ₁ -62-46	*
19	*	*	G ₁ -62-35	*	43	*	*	G ₁ -61-25	*
20	*	*	G ₁ -62-75	*	44	*	*	G ₁ -62-43	*
21	*	*	G ₁ -62-45	*	45	*	*	G ₁ -62-22	*
22	*	*	G ₁ -62-05	*	46	*	底	G ₁ -62-18	*
23	*	*	G ₁ -62-46	*	47	IV c	口	G ₁ -61-85	7
24	*	*	G ₁ -62-55	*	48	*	*	G ₁ -62-11	*

表4 掲載石器一覽

[illegible]

4. まとめ

美々3遺跡では、総じて遺物の出土点数が少なく、その分布密度は0.8点/m²である。しかし、反面では緑色泥岩などの剥片が特定のグリッドにおいて多く出土する特長もみられる。

ここでは緑色泥岩の剥片を中心に土器分布、道跡、石斧との関係から本遺跡の性格を考えてみたい。(註)

(1) 土器の分布について

美々3遺跡における土器の分布は図15のとおりである。調査区を北西-南東へ斜めに区切る線は道跡を示す。以下、分類別の土器の分布について述べる。

Ⅲ群b-3類は調査区の東南部に寄るに従って、その出土量が増加する。またG₂ラインにより西側では少なく、道跡との関係ではそれより南側にかけて多く出土する。ちなみに、昨年の美々4遺跡の調査では、明らかに道跡の南側で多出している。このことから美々3遺跡の未調査区についても南へ行くにしたがいⅢ群b-3類の出土量が増加するものと思われる。

Ⅳ群c類、Ⅴ群a類、Ⅴ群c類は調査区の全域で点々と分布する。しかしⅢ群b-3類の分布のようなまとまりはみられない。これらの土器は同一個体の土器片がまとまりをもって出土する傾向にあり、美々4遺跡の北側でも同様の出土状況であった。ただし、Ⅳ群c類からⅤ群c類に至るまでには相当な時間差があるものの、ここでは例数が少なく似た出土状況であることから一括して取り扱った。

道跡との関係では、Ⅳ群c類、Ⅴ群a類についてはとくに関連がみられない。Ⅴ群c類については、道跡の近くで出土しているものもあるが、美々4遺跡の分布状況からは、とくに道跡との関連は見い出せない。美々4遺跡でのⅤ群c類は、64ライン以南に多く、美々3遺跡の場合も64ライン付近までこないとその出土量は増加しないものと予測される。

(2) 石斧について

美々3遺跡から出土した石器のなかで石斧とたたき石が多いことはすでに述べたとおりである。図16は緑色泥岩の剥片（以下、“剥片”という）の重量分布と石斧（緑色泥岩製）の分布である。図16下の破片をつなぐ線は接合関係を示し、番号は石器実測図の番号と一致する。剥片の出土したグリッドは、184グリッド中105グ

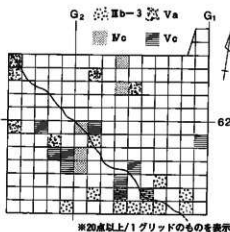


図15 土器分布図

リッドである。重量分布では剥片が1グリッドで50g以上出土した31グリッドを表示している。ちなみに、剥片の点数分布は図17の中左に掲載している。重量分布で最も多いのはG₁-62-11区の888g(57点)である。剥片は南東部に大きなまとまりが1か所あり、ほかは調査区の周辺に点在する。

緑色泥岩の石斧の破片は36点ある(図16下)。ほとんどが破損品であり、完形のものは未成品を含め2点のみである。接合資料は5例あるが、そのうち4例が未成品である(60、61、62、64)。いずれも明確な刃部を作出しておらず、製作途中の破損によるものと思われ、中央部で横方向に割れている。刃部片と頭部片の出土点数比は1:1.8で頭部片の方が多く出土している。破損品の刃部再生を繰り返していけば刃部破片の方が多く出土するはずであるが、事実は逆である。

剥片の存在は、その場所で石斧の製作もしくは使用・再生が行われたことを想起させる。剥片と未成品(破片を含む)の分布が一致すれば、その場所は石斧製作が行われた可能性が高いものと思われる。剥片と未成品の分布が一致するグリッドは3か所ある。実測図番号では、64、56と62の刃部出土のグリッドである。この付近では頭部破片も合せて出土しているが、頭部破片に限って言えば、剥片の分布と一致しない例もある。一方、製品の刃部破片と剥片の分布が一致すれば、そこでは石斧の使用・再生を行なった可能性が考えられるだろう。そのようなグリッドは6か所ある(G₁-61-38・56、G₁-62・61・64・84・85)。

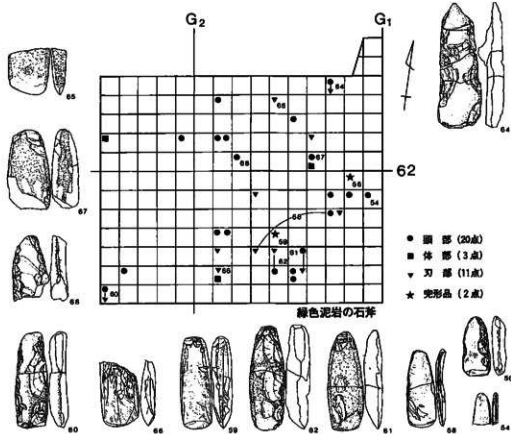
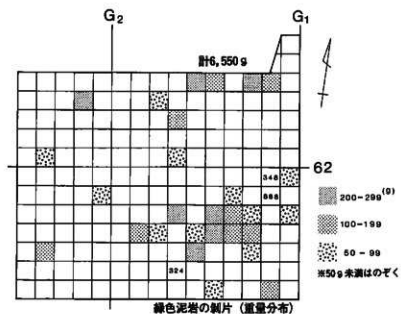
次に石斧製作の際に使用が予想される、たたき石・砥石との分布を比較してみる(図17上)。たたき石の多くは玄武岩の球形礫を素材としたもので、今回の出土品はその小破片が多い。たたき石と剥片の分布が一致するものは、たたき石22点中18点である。剥片重を50g以上に限定するとその点数は6点である。とくにG₁-62-65区では、剥片324gに対してたたき石が4点出土しており、剥片とたたき石の量が対応する。ここでも石斧製作等の作業が行われたであろうことを想起させる。

砥石は遺跡から5点出土しており、いずれも剥片の分布と一致する。砥石はいずれも砂岩の板状礫を素材としており、その片面もしくは両面を利用している。北筒式土器や余市式土器に伴うとされる角柱状の「四面砥石」は出土していない。たたき石のところで述べたG₁-62-65区では砥石も1点出土しており(図14-74)、このグリッドで石斧製作が行われた可能性はさらに高いといえるだろう。

剥片と土器の分布(1グリッド20点以上出土)が一致するのは、Ⅲ群b-3類では10か所と最も多く、次いでV群c類が7か所、Ⅳ群c類が3か所、V群a類が1か所である。剥片と道跡との関係では、道跡の北東側に剥片が多く分布する。

以上要約すると以下のとおりである。

- ① 本遺跡では石斧の未成品が多く出土し、剥片と未成品との分布状況から石斧を製作、使用・再生した場所である可能性が高い。
- ② 剥片とたたき石、砥石の分布が一致するグリッドが多いことも、①の可能性を補強するも



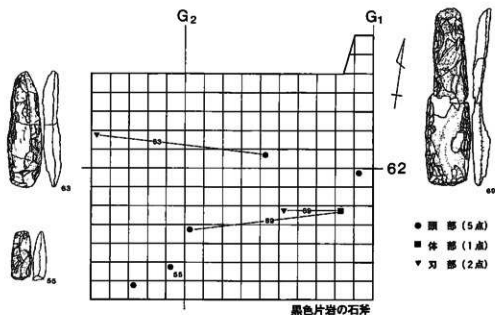
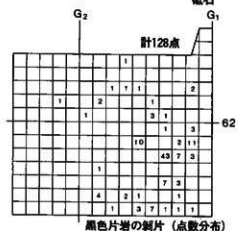
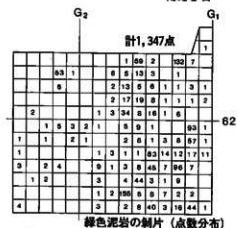
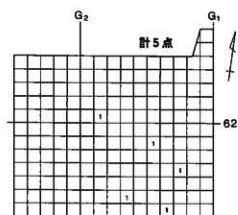
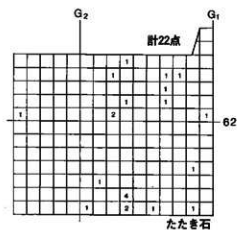
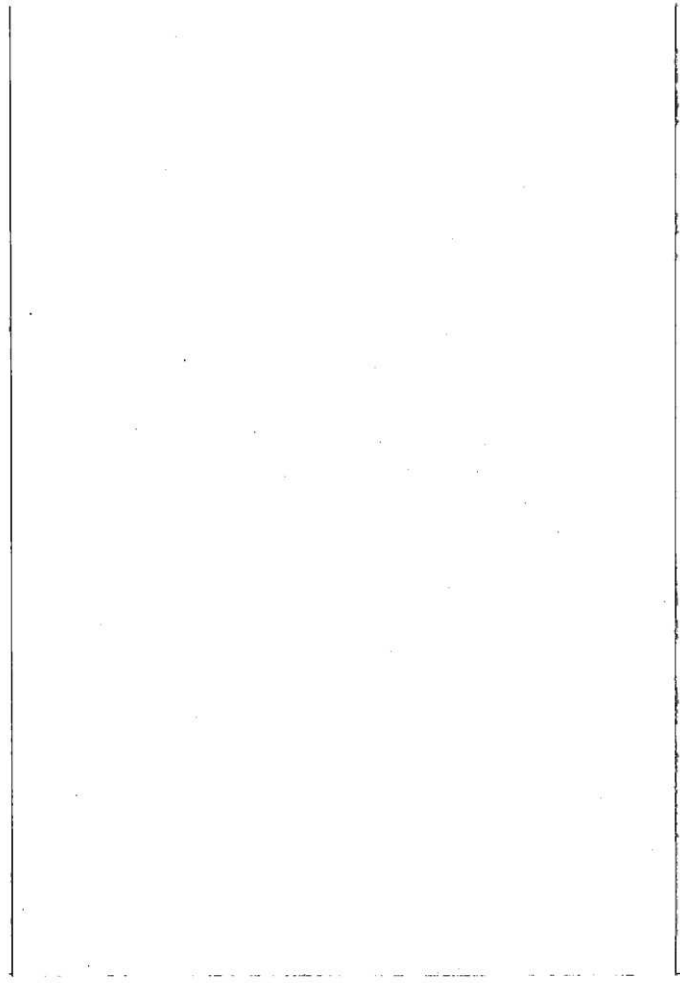


図17 石斧分布図(2)

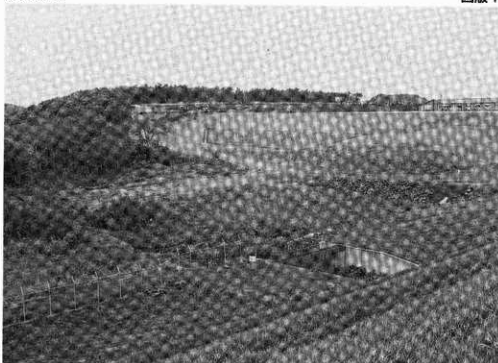
のであろう。

- ③ その時期については、剥片と土器の分布から中期末（Ⅲ群 b-3 類）にさかのぼりうる可能性がある。
- ④ 遺跡については、Ⅲ群 b-3 類の土器の分布がそれより南側にかけて増加することから、すでに中期末にこの遺が存在していた可能性がある。

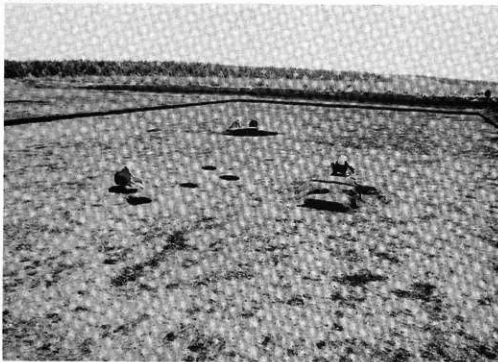
（註）本遺跡からは緑色泥岩のほかに黒色片岩の剥片及び石斧が出土している。これについては、剥片のグリッド別点数と石斧破片の分布及び接合例を図示するにとどめた（図17中右と下）。



版 图 真 写



①遺跡遠景（東から）



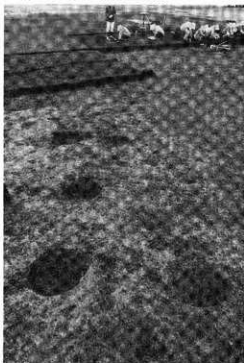
②調査後の風景（東から）



①火山灰除去風景（西から）



②倉包層調査風景（北西から）



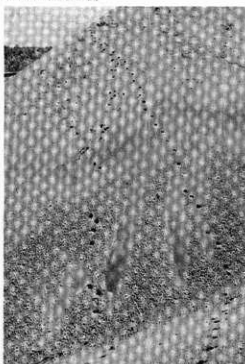
①P-1～5 (西から)



②道跡 (南東から)

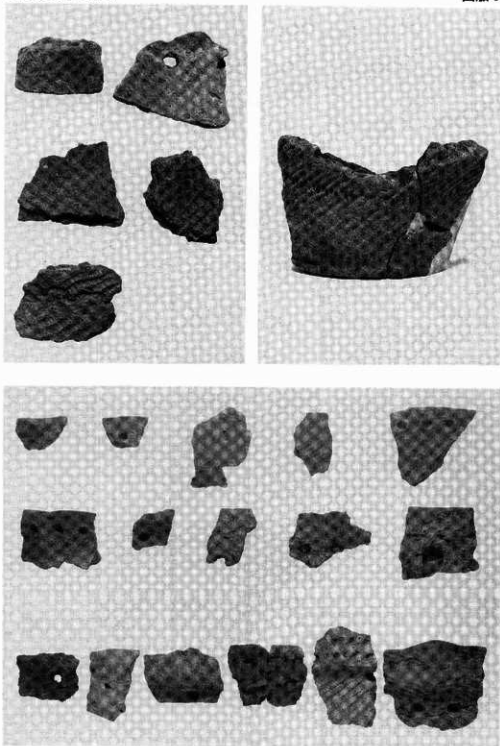


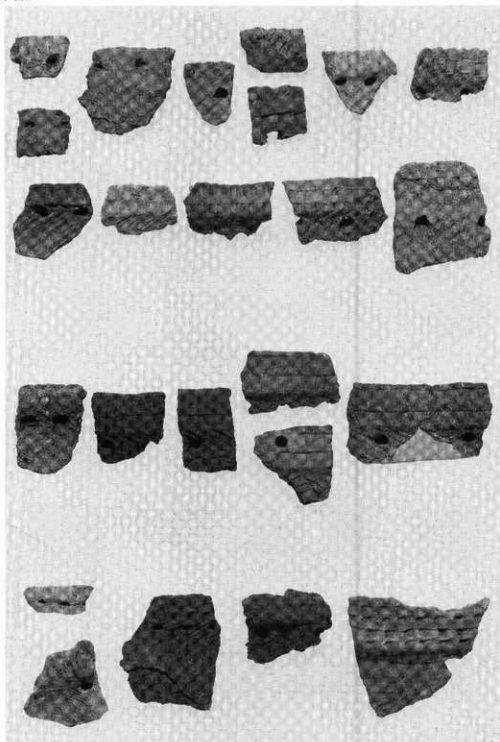
③動物の足跡(1) (南東から)

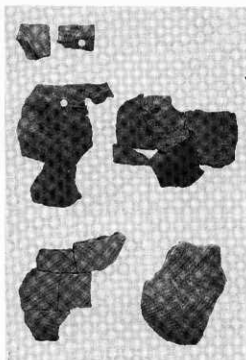
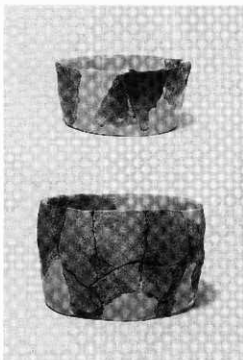
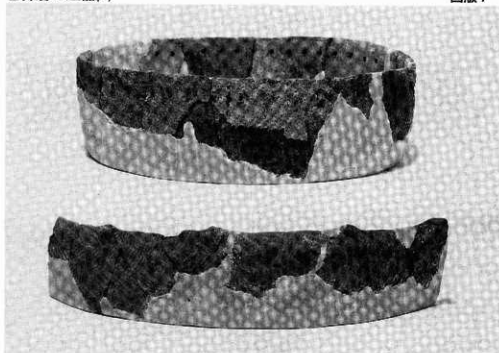


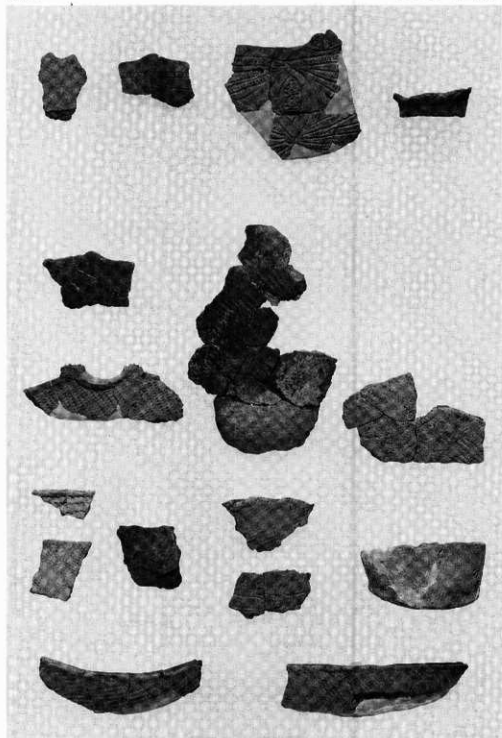
④動物の足跡(2) (北から)



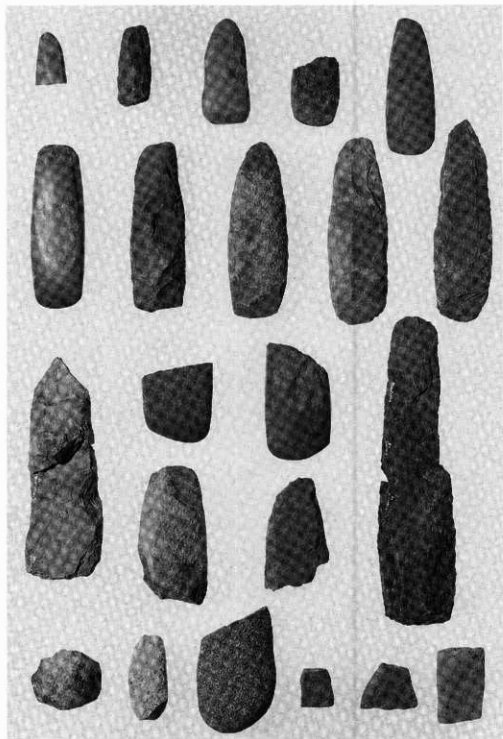












北海道埋蔵文化財センター調査報告 第35集
新千歳空港用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
第2分冊 美沢川流域の遺跡群Ⅰ

発行日 昭和62年3月26日
発行者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒 064 札幌市中央区南26条西11丁目
Tel (011)561-3131
印刷者 富士プリント株式会社
〒 064 札幌市中央区南16条西9丁目
Tel (011)531-4711

